シオン通信

大宮シオン･ルーテル教会 礼拝説教集

2007年１月　　第７号

日本ルーテル教団

大宮シオン・ルーテル教会

〒331-0814

さいたま市北区東大成町 1-229

phone/fax：048-663-0215

URLhttp://omiya.church.jp

Email omiya@church.jp

御国でまた会いましょう

大宮シオン･ルーテル教会

梁　熙 梅(やん･ひめ)

明けましておめでとうございます。という挨拶ももう遅くなりましたが、この年も皆さんにとって神さまの豊かな導きと平安のもとで過ごされる一年でありますように祈っています。

わたしと息子は 31 日(主日)の夜旭川に行き、家族と一緒にお正月を迎えることができました。息子は久しぶりに雪遊びができることが嬉しくて、やはり冬は雪がないと！という言葉を発しながら、雪だるまを何個も作って写真を撮ったり、雪の上に寝転んで雪の冷たさが体の中に浸み込むのを感じたり、大満足の北海道でのお正月だったと思います。お正月の間一日だけスキーを楽しむことができましたが、わたしの方は相変わらず初級コースで頑張り、しかし、去年とは違って一度も転ぶことなく上手にコースを滑ることができたと、大満足しています。息子はどこまでもパパと一緒に行く！といって上級コースまで付いて行き、何度も何度も転んで降りるに時間がかかるようなこともあったそうですが、それでよかったようです。大好きなパパと過ごした短い時間でしたが、好きなことが一緒にできて、満足感溢れるお正月でした。感謝です。6 日(土)に大宮に戻りました。

さて、1 月 7 日の顕現主日の夜、当教会の会員田口喜以さん(故田口芳郎さんのお連れ合い)が 89 歳で神さまの御許へ帰りました。1 月 10 日～11 日、ご遺族とご親族、そして教会の皆さんによる通夜記念式と葬送式が行なわれました。毎月一度お会いしてみことばと聖餐にともに与り、今月も会う約束をしていました。約束を一週間残して、脳幹出血で倒れ、それから 5 時間という瞬く間に亡くなられました。一瞬の出来事のように思えた夜でしたが、神さまが彼女とともにおられ、彼女の最期を迎えてくださっていることを、見守る家族とともに感じたときでした。

神さまのまことの慰めがご遺族の上にありますように、祈っています。

「いかに幸いなことでしょう。あなたの家に住むことができるなら。ました、あなたを讃美することができるなら。いかに幸いなことでしょう。あなたによって勇気を出し、心に広い道を見ている人は。嘆きの谷を通るときも、そこを泉とするでしょう。雨も降り、祝福で覆ってくれるでしょう。」（詩編 83 編 5－7 節）。

天に一人を増しぬ

セラ・ゲラルデナ・ストック作/植村正久訳

家には一人を減じたり　楽しき団欒(まどい)は破れたり
愛する顔　平常(いつも)の席に見えぬぞ悲しき
されば天に一人を増しぬ　清められ救はれ全うせられしもの一人を

家には一人を減じたり　帰るを迎ふる声一つ聞こえずなりぬ
行くを送る言一つ消え失せぬ
別るゝことの絶えてなき濱邊に　一つの霊魂(たましい)上陸せり
天に一人を増しぬ

家には一人を減じたり　門を入るにも死別の哀れに堪えず
内にいれば空しき席をみるも涙なり
さればはるか彼方に　我らの行くを待ちつゝ　天に一人を増しぬ

家には一人減じたり　弱く浅ましき人情の霧立ち蔽いひて
歩みも四度路に眼もくらし
さればみくらより日の輝き出でぬ　天に一人を増しぬ

實(げ)に天に一人を増しぬ
土の型にねち込まれて　基督を見るの眼もくらく
愛の冷ややかなる此処　いかで我らの家なるべき
顔を合わせて吾が君を見奉らん　彼所こそ家なれまた天なれ

地には一人を減じたり　其の苦痛、悲哀、労働を分かつべき一人を減じたり
旅人の日毎の十字架を担うべき一人を減じたり
されば贖はれしたましひの冠を戴くべきもの　一人を天の家に増しぬ

天に一人を増しぬ　曇りし日も此一念輝かん
感謝賛美の題目更に加はれり
吾らの霊魂を　天の故郷に引き揚ぐる
鎖の環更に　一つの輪を加へられしなり

家には一人を増しぬ　分るゝことの断えてなき家に
一人も失わるゝことなかるべき家に
主耶蘇よ　天の家庭に　君とともに座すべき席を
我ら全てにも　あたへたまえ

聖書のみことば

ルカによる福音書 2 章 1～20 節

　そのころ、皇帝アウグストゥスから全領土の住民に、登録をせよとの勅令が出た。これは、キリニウスがシリア州の総督であったときに行われた最初の住民登録である。人々は皆、登録するためにおのおの自分の町へ旅立った。ヨセフもダビデの家に属し、その血筋であったので、ガリラヤの町ナザレから、ユダヤのベツレヘムというダビデの町へ上って行った。身ごもっていた、いいなずけのマリアと一緒に登録するためである。ところが、彼らがベツレヘムにいるうちに、マリアは月が満ちて、初めての子を産み、布にくるんで飼い葉桶に寝かせた。宿屋には彼らの泊まる場所がなかったからである。

　その地方で羊飼いたちが野宿をしながら、夜通し羊の群れの番をしていた。すると、主の天使が近づき、主の栄光が周りを照らしたので、彼らは非常に恐れた。天使は言った。「恐れるな。わたしは、民全体に与えられる大きな喜びを告げる。今日ダビデの町で、あなたがたのために救い主がお生まれになった。この方こそ主メシアである。あなたがたは、布にくるまって飼い葉桶の中に寝ている乳飲み子を見つけるであろう。これがあなたがたへのしるしである。」すると、突然、この天使に天の大軍が加わり、神を賛美して言った。「いと高きところには栄光、神にあれ、地には平和、御心に適う人にあれ。」天使たちが離れて天に去ったとき、羊飼いたちは、「さあ、ベツレヘムへ行こう。主が知らせてくださったその出来事を見ようではないか」と話し合った。そして急いで行って、マリアとヨセフ、また飼い葉桶に寝かせてある乳飲み子を探し当てた。その光景を見て、羊飼いたちは、この幼子について天使が話してくれたことを人々に知らせた。聞いた者は皆、羊飼いたちの話を不思議に思った。しかし、マリアはこれらの出来事をすべて心に納めて、思い巡らしていた。羊飼いたちは、見聞きしたことがすべて天使の話したとおりだったので、神をあがめ、賛美しながら帰って行った。

説　教

『さあ、ベツレヘムへ行こう』

クリスマスの出来事は夜の出来事でした。

この世には時間的に数えられる「夜」があり、私たち自身の中にも「夜」があります。この「夜」という真っ只中に救い主の光は輝いたのでした。神の恵みの光はこの「夜」を照らす光として、この世に、そしてわたしたちに与えられたのです。

ルカによる福音書１章78－79節には、パプテスマのヨハネのお父さん、ザカリアの言葉が記されていますが、「…高いところからあけぼのの光がわれらを訪れ、暗闇と死の陰に座している者たちを照らし、我らの歩みを平和の道に導く。」と述べられています。

この言葉の中にはクリスマスの意味が語られています。

このザカリアの述べられた言葉の中に、「暗闇と死の影に座っている者たち」といった表現がありますが、これはいったい誰のことを指しているでしょうか。恐らく、当時の、イエスさまがお生まれになる際に関わっていた人たちの中の誰かのことをさしているとも考えられます。しかし、これは当時の人たちのことだけではなく、現代の私たちのことを指していることと考えることもできましょう。それは、現代の人々にも「暗闇と死の陰」は存在するからです。だからこそ、現代のわたしたちにもクリスマスのメッセージは伝えられなければならないのです。

それでは、いったい、現代のどこに「暗闇と死の陰」があるでしょうか。

教会で執務をしていますと郵便物がたくさん届きます。いろいろの支援団体からの支援募金のお願いが、実際行なっている具体的な働きの記事が載せられた月報と一緒に送られてきます。それらを掲示板に貼ったりすることもわたしの仕事の一つですが、個人的には支援をお願いしてくるすべての団体に支援金を送りたい。直接現場に行って手伝うことができない分、少しでも力になる何かができないだろうかといつも思っています。しかし、現実はなかなかそこまでいかない、自分の限界を感じてしまいます。

このように、世界にはいろいろの状況に置かれている人たちが助けを必要

としています。食料が不足していて栄養失調にかかっている子どもたち、飲む水や薬がなくて、本当は助かるはずの大切ないのちが死を迎えざるを得ない、そんな状況です。わたしたちが普通に使っている水や薬がないために死を迎えざるを得ないのです。日本を一歩離れていけばすぐこのような状況に出会うことでしょう。または、今この時間も戦争という武力の下で、恐怖感に覆われ、不安や挫折を繰り返している人たちが大勢います。

豊かな国とされている日本でも今年大勢の人たちが「暗闇と死の陰」を体験してきました。苛められて、苛められている子どもとのかかわりの中で、または家族間のトラブルの中で互いが殺し合う事件。または自然災害や思いもかけない交通事故によって尊い命を失った人たちも大勢います。

このような外部からの刺激によって与えられる「暗闇と死の陰」である状態。しかし、今ここにいる私たちはこのような災害の被害はなかったにしても、内面に同じものを所有していたりはしないでしょうか。

人の内面には、だれでもこの「暗闇と死の陰」があるそうです。それが、人によって、場合によってはそのときの心理状態によって大きく現れたり小さく現れたりするだけだそうです。

この他にも特に私たちは人間関係を通して「暗闇と死の陰」を体験させられる場合もあります。何しろ、私たちは競争社会の中にありますから、常に形にしない競争を繰り返す中で暮らしているのではないかと思うのです。競争相手である、「あの人さえいなければ」という気持ち。または、「負けたくない」、「勝つこと、できること」だけが何より優先される。この中では、どうしても、「失敗して、いなくなって欲しい相手」ができてしまうというのです。このような思いが結果的にはその人の性格と心を歪めてしまうのです。

このようなことは、本当は恐ろしいことです。その中から偏見的な見方が起こり、苛める側と苛められる側ができ、小さな争いを通して戦争へまで繋がるようになりますから、とても恐ろしいことです。

ですから、「暗闇と死の陰」の状態は、光に照らされていない状態を指していると言えましょう。光に照らされていない闇の状態は、隣にいる人を見えなくさせます。そして、人と人との関係をばらばらにさせてしまいます。人に対する嫉みや憎みや競争心で、人を傷つけ、そして自分も傷つけてしまうのです。

人は誰もがこのような生活部分や心理的な部分を所有しているとするなら、ここにいるわたしたちもこのような闇の部分を抱えて座っているということでしょう。

世界で初めのクリスマスの夜の野原で羊たちを守り野宿していた羊飼いたちも、「闇と死の陰」に座している者たちとして、聖書に描かれています。というのは、羊飼いたちは安息日を守ることが許されていない人たちでした。イスラエルの社会において羊飼いという仕事は、隔離された生活を強いられる職業でした。ですから、彼らは一般社会から隔離された生活を強いられていたのです。経済的な貧しさからくる暗闇を抱え、その上、神さまを礼拝することが許されていない、神の言葉から隔離された二重三重の暗闇の世界です。そんな彼らに、「**恐れるな！**…今日ダビデの町であなた方のために救い主がお生まれになった…」と天使から語られた言葉は、普段礼拝できる人よりも遥かに響きのある言葉ではなかったのかと思います。羊飼いたちは、まさに恐れる生活をしていましたからです。律法に即して立派な生活を送っている人たちを恐れていました。そして、何より神さまを恐れていました。自分たちは神さまの掟にお答えしていないから、みことばから離れている生活をしているから、自分たちは御心に相応しくない者、価値のない人間だと思っていました。ですから、彼らは置かれていた状況を憎んでいたのかもしれません。そして、自分自身を軽蔑していたのかもしれません。「暗闇と死の陰」にいる自分が、どうして価値ある者と考えられるでしょうか。しかし、その彼らにこそ、クリスマスの光は臨んだのでした。

クリスマスは、このような人、「暗闇と死の陰」に座している人、「暗闇」や「死の陰」を抱えている人、そういう人々に訪れた神の憐れみの「光」なのです。羊飼いたちは、はっきりと、「あなた方のために救い主がお生まれになった」と語ってくれた天使の声を聞きました。このことは、「闇を抱えた罪人のために主が来られた」という意味です。「罪人」の赦しのために、そのためにご自身すべてを献げる方が来てくださったということです。だから「恐れるな！」と言うのです。「恐れるな！」ということは、あなたは「赦されている」ということです。赦しがなければ恐れることは止まらないと思います。恐れるな、あなたは赦されている。だからこそ、主は「あなた方のための救い主だ」ということ。あなた方の赦しのために主が来られたということ。あなたがたはもはや価値のな

い者ではない。自分を呪ってはならない。イエスさまの光の中で自分自身を見直さなければならないということ。あなたのために生まれた方ですから、今方の下であなたは価値あるものになり、今のあなたのままで生きることがゆるされ、今のままでいいのだとこの方によって認められているということ。

暗闇と死の陰の只中で「恐れるな！」というメッセージを聞いた羊飼いたちは、「さあ、ベツレヘムへ行こう」と、直ちに天使が教えてくれたベツレヘムへ向かいました。そして、家畜小屋の中の飼い葉桶に寝かされているイエスさま、自分たちのためにお生まれになってくださった方に会うことができました。まことのクリスマスの光に照らされるようになったのです。生まれて初めて神さまを礼拝することが許され、救い主を拝むことが出来ました。彼らは、世界で始めてのクリスマスの夜に、神の前でありのままの自分らしく生きることが許されていることを確かめ、それが本当の喜びであり、まことのいのちを生きることであると知らされたのでした。

彼らの置かれていた「暗闇と死の陰」の世界を照らしたクリスマスの光は、彼らの人生を百八十度変えました。羊飼いたちは、帰りの道で、神を讃美しながら帰っていきました。もはや神さまは、彼らにとって恐れる対象ではなく、自分たちをありのまま受け入れてくださる方、人々から、自分自身から価値のないものとされていた自分を価値ある者として受け止めてくださる方。「わたしにとってあなたは尊い、わたしはあなたを愛している」と語りかけ、恐れることなく雄雄しく人生を羽ばたいていけるように勧めてくださる方だと確信できたのです。

このように、心が豊かにされる中で、羊飼いたちは自分たちの生活の場へ帰って行きました。天使に出会う前までと同じ場所です。これからも今までと変わらない場所で同じ働きをすることでしょう。しかし、そこが全く変ったのです。「暗闇と死の陰」の座が、差し出されたクリスマスの光によって恵み豊かな生活、祝福された場となっていくのでした。「神を礼拝し讃美する」座として変えられました。彼らの心の闇がクリスマスの光によって去ったからです。

わたしたちもこの夜、クリスマスの光に照らされた者となりました。そして、それぞれの場へ帰っていきます。救い主に出会ってひれ伏した者として帰ります。それは、今までと何一つ変わらない

場です。でも、その生活の場が、わたしが変わることによって変わっていくということ。ため息と思い煩いが絶えなかった場が、神さまの恵みが絶えない場となっていくということ。何より、生活が空しく、意味のない人生だと思ってどうしようもなかったわたしの生の座が、もはや神さまを讃美し、礼拝し、祝福された者として生きる、そんな人生へと変えられたということ。

クリスマスの神の出来事の中で、羊飼いに語られたことがわたしたちも同じく言われています。それでも、これから羊飼いたちにもわたしたちにも、人生の闇は粘り強く離れないことでしょう。外からの闇が、そして私たち自身の内なる罪の闇がわたしたちを苦しめてくることでしょう。しかし、闇がどんなに深くても、深い闇を照らすクリスマスの光、神の憐れみの光は、輝き照らすことを止みません。救い主がわたしとともにおられ、そこで主の赦しがなされるのなら、たとえ深い闇の中に置かれても、それを恐れません。雄雄しく人生を羽ばたいて進むのです。

クリスマスの光があなたの上に輝いています。その光に照らされて、さあ出て行きましょう、ベツレヘムへ。クリスマスの主がおられる私たちの生活の場、わたしのベツレヘムへ。

【礼拝予定】

【主日礼拝】毎週日曜日 朝 10 時 30 分～

1月７日(日)　顕現主日 聖　書：イザヤ 60:1－6・エフェソ 3:1-12・マタイ 2:1-12 主　題：導かれる歩みへ　　讃美歌 56((教会)/59(教会)/49(教会)
1月 14 日(日)　主の洗礼日 聖　書：イザヤ 42:1－7・使徒 10:34－38・ルカ 3:15-22 主　題：神の心を生きる方　　讃美歌 60(教会)/55(教会)/247（教会)
1月 21 日(日)　顕現節第３主日 聖書：エレミヤ 1:4－8・１コリント 12:1-11・ルカ 4:16-32 主題：貧しい者とともにいる神　　讃美歌：57（教会）/258(教団)/423(教会)
1月28 日(日)　顕現節第４主日 聖書：エレミヤ 1:9－12・１コリント 12:12－26・ルカ 51－11 主題：お言葉ですから　　讃美歌 301(教会)/484(教会)/394(教会)

【水曜礼拝】毎週水曜日　午後７時～

1 月 17 日　第三水曜日 聖　書：詩篇 16 編　　主　題：主はわたしの命を支える方
1 月 24 日(水)　第四水曜日 聖　書：詩編 17 編　　主　題：　み翼の陰に
1 月 30 日(水)　第五水曜日 聖　書：詩編 18 編　　主　題：主はわが盾、わがいのち

（説教主題は今のところの予定です。変更になる場合もあります。）

【その他の集会】第三日曜日１２時３０分～ 聖書をやさしく学ぶ会は１月は休み。
随時(希望にあわせて)キリスト教入門講座・面談など
どの集会もどなたでもご参加いただけます。お待ちしております。